

これからの日本経済に対する 日本人としての心得

経営トップ講義 @県立大 2018 「ビジネス経済の実践」要旨

①



「日本らしさを考えるべき」と話す松村代表取締役
|| 県立大佐世保校(山下哲嗣撮影)

永代ハウス代表取締役

まつむら せいいち
松村 清一氏(59)

県立大地域創造学部実践経済学科2年生を対象とした本年度の「ビジネス経済の実践」が始まった。地域の中核企業を率いるリーダー14人が、仕事の哲学や経営理念、企業戦略を語る。10月9日から来年1月29日まで開かれる講義の要旨を順に掲載する。

住宅メーカーの弊社は、鉄筋コンクリート構造の製品から扱い始め、2、3年続けるうちに、木や土との交わりが重要と感じた。業界には左官

や建具、大工などさまざまな職人がいる。基本に戻って人材を育て、技術を磨き上げることが、本当の差別化と思いい、1998年ごろから約12年をかけた、製品の方向付けをしてきた。
行き着いたのは木づくりの家。昔の建築文化を守り育て、近代文化と融合させた形で守っていく考えに至った。木と

家と庭と人の交わりで家庭づくりができる。家だけ建てても子育てや夫婦関係はうまくいかない。弊社はソフト面もカバーできるよう努力し、「思い」を提供したい。
曰く「部下には、先人に学ぶことが重要だと話している。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」と言われる。人間は体験に学ぶとうす

るが、それは一番おろか。なぜなら、人間は欲に左右される。まずは人間をよく理解し、過去の歴史を振り返って考えるべきだ。
日本の歴史を考えると、戦後の高度経済成長期を経て先進国になったと言われるが、本当にそうだろうか。当時の成長は1ドル360円の為替の影響が大きく、賃金も安かった。大もうけして当然。日本の自力ではなく、アメリカなど他力による結果だった。民主主義の国となったが、投票率や女性の政治参加が振るわず、欧米からの評価は低い。こうした歴史を多面的な俯瞰(ふかん)の目で見詰め、これからの自分の確立に役立てることが非常に重要だ。
今はIT(情報技術)やAI(人工知能)の時代と言われる。確かにデジタル化は必

歴史学び自分の確立を

要だが、人間としての柱や持論がないままでは、逆にデジタルに使われる。まずはアナログで人間の基本をしつかりつくり、活用できるようにするべきだ。
日本の歴史を知り、ビジョンを掲げ、何をすべきかを考えなければならぬ。スポーツで教えられるように「心技体」をバランスよく育てていくべきだが、一番大事なのは「心」の部分だろう。そのためにはコミュニケーション力を磨くことが大切だ。
これからの日本社会で求められる人や組織はどのようなものか。欧米を目指すのも悪くはないが、やはり日本らしさを考えるべきだと思う。日本人しかできないことは、たくさんある。まずはそこを指すことがわれわれの使命だと思う。将来に向かって、いい社会、いい町、いい自分をつくらせていただきたい。
(田下寛明)

|| 次回は23日に掲載します ||